

4. 貴族的と平民的

文芸上の貴族的な精神と平民的なそれに関する問題は、すでに多くの人が議論していて、たいがい平民的なのは最もよく、貴族的なのは全く悪いとしている。わたし自身以前はやはりそう考えたが、今ではいささか疑問に思っている。変動しつつ連続する文芸は、このように截然と区別できるのか。一時代の趨勢を代表するものとするのは、不可能でないかもしれない。しかしこのようにはっきりと優劣をつけることはできるのか。これはいささか不都合を免れないと思う。なぜならわれわれは実際の社会問題を離れて、ただ文芸上で、貴族的な精神と平民的なそれを言うのは、いずれも人間の表現であって、誰が是で誰が非だと指定することはできない。ちょうど規則的で普遍的な古典精神と自由で特殊な伝奇精神とが、相反しているようで実は並存していて、消滅する時がないように。

人は近代文学は平民的で、十九世紀以前の文学は貴族的だと言う。それも事実であるけれどもいささか皮相を免れない。文芸によって生活を維持できない時代においては、もちろん貴族あるいは中産階級だけしか文学をいじれない。しかし古代まで遡れば、文芸の初期にはまた平民的であることがわかる。われわれは史詩が神人英雄の事跡を歌うのを見て、たやすく“功德を歌頌する”のは、貴族文学の始まりだと誤解する。しかし実はそれこそが平民の文学の本物なのである。だから社会階級上の貴族と平民という二つの称号は、本義に照らして文学上に応用して、二つの階級の作品を区分しようとするのは、当然不可能なことである。たといわたしが以前に「平民の文学」という文章のなかで、普遍と真摯という二つの条件によって、平民的な文学と貴族的なそれとを区分する基準にしたとしても、やはりそれほど妥当だとは思えない。わたしは古代の貴族文学の中には決して真摯な作品を欠いているとは思えない。そして真摯な作品には自ずと普遍的な可能性があると思う、思想と形式のいかに問わず。わたしの今の意見は以下のである。文芸上貴族的と平民的な二つの精神があると仮定することはできる、ただし人生に対する二つの態度だけであって、人類共通のものは、決してある一つの階級に専属しない、その分布は最初経済状況と関連する——これがつまり二つの名称の来源であるけれども。

平民的精神はショウペンハウアーの言う生きんとする意志だと言うことができ、貴族的精神とはすなわちニーチェの言う超克の意志だと言うことができよう。前者は有限の平凡な存在を求め、後者は無限の超越的な発展を求める。前者は完全に入世間であり、後者はほとんど出世間である。こうした渺茫とした話は、われわれがもし中国文学の例を引いて、ざっと比較するならば、具体的な解釈が得られよう。中国の漢晋六朝詩歌は、貴族文学であり、元代の戯曲は平民文学だと誰もが承認する。両者の違いは、一つが古文で書かれ、一つが白話で書かれていることにあるだけでなく、また一つは士大夫の書いたもの、一つは無名の人が書いたものにあるのでもなく、両者の人生観の違いにある。われわれがもし歴史の眼光で見ると、これは国語文学発達の正しい軌道であると思うが、この両者を比較して読むと、どうしても後者に対して一種漠然とした不満を感じてしまう。これは当然個人の気質によっても違うが、わたしが友人の疑古君と話していて、彼もそのような感想を持った。われわれが不満とするところは、その時代の平民文

学の思想は、あまりに現世利益的すぎて、その時代を超越する精神がないことである。彼らは人生を是認するが、ただあまりに楽天主ぐる、これは現状に満足しすぎているということである。貴族階級は社会的に自己の特権によって、世間での一切の可能な幸福を全て享受し、何の羨むところも拘るところもない。そのため一種超越的な追求を引き起こす。詩歌における神仙思想がすなわちそうした精神の表れである。平民に至っては、人々が手にして当然の生活の喜びをも手に入れることができず、その理想は自ずとこの望むべくして実現できない貴族の生活に限られ、そのほかにはむろん別の願いはない、したがって文学上に表れてくるのはああした出世を果たし多くの妻妾を得るという団円思想になってしまう。わたしはこれによって二つの精神の優劣を判断しようとは思わない。生を求める意志はもともと人間性的なものであるが、ただこの一つの意志で人生の全体を包括できないことは、やはり自明の事実である。

わたしはある一つの時代のある一つの傾向が文芸での永久の模範になれるとは信じないが、本当の文学が発達する時代には必ず多少とも貴族的な精神が含まれなければならないと信ずる。生を求める意志はもちろん生活の根柢であるが、もし人に努力して“全にして善美”なる生活を求めしめる超克の意志がなければ、適応の生存は容易に退化的にして非進化的なものになってしまう。人々は文芸における平民精神を賛美するが、極力旧劇には反対する。しかし旧劇はまさに平民文学の泰斗であるが、ただその欠点があまにも露骨であるので、みんなの攻撃に遭う。貴族的精神は岐路に入ると、ウィルヘルム 2 世の態度になってしまうが、当然注意しなければならない。わたしは文芸は平民的精神を基調とし、それに貴族の洗礼を加えるべきで、それでこそ本当の人間の文学になれると思う。もし社会的な一時の階級闘争を無理に芸術に移して、労農専制を実行しようとするなら、その結果は必ず経済・政治とは相反して、退化の現象であろう、旧劇はつまりその一つの影である。文芸上からいえば、最もよい事は平民の貴族化、——凡人の超人化である。なぜならば凡人がもし超人になろうとしないならば、すなわち末人に化してしまうからである。

※初出：1922 年 2 月 19 日『農報副刊』